

---

# 水色の絵の具。

栃木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水色の絵の具。

### 【Zマーク】

N1193D

### 【作者名】

栃木

### 【あらすじ】

私がだけが不思議に思っている。私以外の誰も“ソレ”を不思議とは思わない。世の中というのは流れ、流れ上手くできているんだなあと、そのとき感じた。

(前書き)

企画『テーマ小説』参加作品です。  
「水小説」と検索すると参加した作家さんの作品がありますので、  
ぜひ読んでみてください。

パレットに並べた色を見て、空を眺めて。  
何処かの大平原を思い浮かべて、水道の蛇口から流れる水を思い  
出して。

頭を抱え込んだ。

「ちょっと友里香どうしたのよ。急に頭なんか押さえたりして」

その光景を見ていたであろう雪江が後ろから心配そうな声で聞く。

「うん。あのね、頭痛くなっちゃった」

今は四限目で美術の授業中。『デッサンの真っ最中だ。小さなケトルと鮮やかな赤色をした林檎、それと水の入ったグラスがテーブルの真ん中に置かれている。それを囲うように生徒が座り、各々の角度から対象を『デッサン』している。私の位置からは一番奥にケトル、手前に林檎、その間にグラスが見えている。対象を『デッサン』するのになかなか描きやすい位置を陣取つたつもりだ。

「いや、それは態度見てたら分かるって。だから何があつたの？  
頭痛でもするの？」

「え、頭痛は昔から……」

私が偏頭痛を持っていることを雪江は知っているはずだけじ。

「あー違う違う。だから、なんで頭抱えてたりしたのって言いたか  
つたのよ。描きづらい位置にでも座っちゃった？」

雪江はよく私のことを気にかけてくれる。

いつでも、どんな時でも、私がいつもと違うような行動を取ると  
すぐ隣にきて私のことを心配してくれる。そう思ってくれる人がい  
るということは、あまり実感できないけど、物凄く幸福なことな  
かもしねり。

それに彼女からすれば、私は生まれたばかりの仔猫みたいに見え  
ているんだろう。自分の目の届く場所に居てくれないと、勝手に何  
処かへ行つてしまつようと思つてゐるのかもしねり。まー實際、

私自身でさえ何処へ行つてしまつのか分からなくなる」とがあるわけだし。私のことなのにね。

きっと彼女は、そんな私の抜けている部分が心配なんだ。多少違うかもしれないんだけど、今はそういうことにしておこう。

「笑わない？」

私の口癖だ。何かを聞くとき、必ず言つてしまつ言葉。止めようと思しても、ついついつい口から出てしまつ声。

「笑わない」

そして雪江の返答。この言葉を今まで何回使つてきただろうか。それは私と雪江の会言葉のよつにも聞こえてくる。

「うん。じゃあ話すね」

「はい、どうぞ」

「あのね。水って何色か分かる？」

雪江の体が一瞬だけ凍る。私の疑問はいつも唐突だから仕方ないと言えば仕方ない。けど、そこは長い付き合いの雪江だ。取り乱すことなく静かに答えを返す。

「無味無臭無色透明でしょ」

「えっと、味とか臭いは聞いてないんだけど」

「あーはいはい。で、だから無色。色なんてないじゃない。そののグラスだって、ほら」

そう言って中央に置かれたグラスを指差す。その中には半分ほどの水。それは雪江の言う通り無色透明。色なんて全く着いてなんかない。

「うん。そうなんだけど」

「だけど？」

「それじゃあ、この色は？」

ガサガサと自分の絵描き道具の中から絵の具のセットを取り出し、そこから一つの絵の具を抜き取つて雪江に見せた。

「い、色？ そんなの分かりきつてるじゃない。その色は……」

そう。その色は誰もが一度は、一日に一回は見るであろう色。見

上げた空一面に広がる色。濃くもなく、かといって薄くもない、その中間色でやわらかい感じのする色。

「水色よね」

なんの疑問もなく答える雪江。

「もう一回言つてみて」

「だから水色つて」

「水色だよね」

「うん。それがどうかしたの？」

雪江は首を傾げる。私が何を言おうとしてるのか、いまいち分かっていないようだ。折角一回も言わせたのに。

「じゃ雪江、あれは？」

テーブルの上の水が入ったグラス。

「デッサンの対象」

「じゃなくて。グラスの中に入ってるのは？」

「水でしょ」

「水は何色

「無色透明

「じゃこの色は？」

再び手に持った絵の具を指差す。

「だから水色つて。……あーあーはいはい。うん、友里香が何言いたいのか分かった。分かったから、そう剥きにならないでつてば」

何度も頷いて、やつと謎が解けた雪江。その顔は実に晴れ晴れしい。が、すぐさま顔色が怪しくなつていった。

「つまり友里香は、水は透明なのにどうして水色はこの色をしてるんですか。ってことを言いたいんでしょう」

「そうそう

「うん。私に分かるわけないじゃん」

即答だった。

さも平然と、分からなくて当たり前よん、とでも言い出しそうなくらいニシコリと笑いながらの回答。それでいいのか雪江！ 流さ

れるまま、分からぬまま、皆が使つてゐるからいにじやん別に的な態度で満足するのか。お生憎様、私にはそんな曲がつた根性は持ち合わせてはいない。

「だつて矛盾してゐんだよ、これ。どう考へてもおかしいって「友を呼ぶ私の声。

「うーん。けどさ、この色が水色ってことで皆理解しちゃつてるし、今更これをどうして水色って言つんですか？ つて聞かれてもねえ。答えに詰まるよ」

類は友を呼んではくれなかつた。

「それに、そんなこと言つてたら世の中の言葉全てが訳わからんないようなもんじやない。例えばこれだつて、どうして赤つていうのか知らないわけだし」

そう言つて真つ赤な絵の具を私に見せる。

「あう。それはそつなんだけど」

頭を抱え込んだ。

「」の終わりのない疑問の山々、ちつぽけな私」ときが手を出すべき話ではなかつたということなのか。しかし、一歩でもその領域に足を踏み入れてしまつた以上、もう引き返すことはできない。

「うん。頭なんか押さえてるから何事かつて心配してたけど、いらないお節介だつたね。今日もいつもの友里香で安心した」

二ヶコリスマイルだけを残し、再び自分のデッサンに戻る雪江。きっと彼女の心の中は透き通つてゐることだろう。その代わり、私の心中には大きな塊がずつしりと居座つてしまつたようだ。

「ええ。雪江え 一人にしないでよ。私ほんとに悩んでるんだから」「うんうん。若人よ、悩め悩め」

「他人事だと思つてるしい」

「ま、他人事だしね」

「コホン、と後ろで丁寧な咳払いの声。

「他人事でも何でも構わないが、今は授業中だぞ。ほりちやんとデッサンしなさい」

後ろには美術の担任が立っていた。いつから立つてたのかは知らないけど、さつきの話の一部始終は聞いていたんだろう。

「ちゃんとデッサンしてまーす」

「してまーす」

はあ、と吐き捨てた溜め息。それは私のものだ。その息は重く、下へと落ちて消える。その後に続いて先生の溜め息も一つ。

「どうした三島。元気ないぞ」

「先生、友里香は今最大級の疑問と戦ってる最中なんですよ。ね、友里香？」

「うう、雪江のいじわる」

「これはこれは最大級の疑問か。三島、それはもちろん美術に関係のある、そしてデッサンに集中できないほどの大問題なんだろうな」「そうです」

先生が一步後退する。まさか先生の問い合わせし私がイエスと答えるとは思つてなかつたらしい。けど、先生が分かるのだろうか。皆が何も思わないようなことだ、先生だって知らないことがある。けど、思えば思つほど不思議で仕方ない。

水の色は透明。

水色は水色。

この些細な違いだけで、そのものの色が全く違うものになるんだ。なのに誰も不思議がらない。きっとこの美術室の中では私だけ。もしかすると全校生徒のうち私だけというのもあり得る。答えは……きっと一生掛かったとしても出でこないだろう。そして何年も何十年も何百年経つても、水の色は透明で、水色は水色のままに違うな

い。

「先生っー。」

急に大きな声を出すものだから、語尾が裏返つてしまつた。

「な、どうしたんだ」

「どうして水色は水色って言つんですか？」

「み、え、は？」

きょとんとした先生の顔。

答えは、きっと出ない。

チャイムが鳴り、授業が終わり、午後まで昼の休憩がはじまる。

チャイムの鐘が、低く響く音が行き場のない私の気持ちをがっかり緒抑え、心の中の塊は低く呻いていた。

(後書き)

普段書かないジャンルだったので正直手こずりました。  
急ぎでやっていたので、突っ込みどころが多くあると思いますが、  
暖かく見守つていただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1193d/>

---

水色の絵の具。

2010年10月8日15時52分発行